（資料）

アイメリック・デ・ペギヤンの哀悼歌

高　名　康　文*

はじめに

福岡大学研究所報に発表した「12 世紀のトルバドゥールによる哀悼歌（planh）の翻訳」[1]に続いて，「13 世紀のトルバドゥールによる哀悼歌（planh）の翻訳」と題する予定の仕事をするつもりであったが，その資料がまだ揃わないうちに，あまりにも急なことに佐藤正明先生が亡くなり，その後，早くも福岡大学人文論叢から追悼号を出すという。他に提出するべき原稿を持ち合わせていないため，13 世紀のトルバドゥール，アイメリック・デ・ペギヤン（Aimeric de Peguilhan）が歌った哀悼歌（古オック語で planh） 4 編を翻訳し，先生への私の哀悼に代える。

トルバドゥールの哀悼歌（planh）について

哀悼歌（planh　プラーニュ）とは，直前に亡くなった王侯や領主，あるいは詩人と個人的なつきあいのあった恋人や友人の死を悼んで歌う歌のことであるが，そのディスクールは，ほぼ例外なく「死者の礼賛」，「詩人・共同体の嘆き」，「神へのとりなしとしての祈り」の三つの主題から構成される[2]。

このことを，ここに訳した「今や『値打ち』が崩壊しつつあることが明らかになりました」（Era par ben que Valors se desfai）を例にして説明しよう。「死者の礼賛」とは，この歌の第一詩連に見られるように，当時の宮廷における価値体系を背景とした，故人の人格的あるいは社会的な力の賞賛である。題名にある「値打ち（valor)」とは，このよう

---

* 福岡大学人文学部教授

[1] 高名康文「トルバドゥールによる 12 世紀の哀悼歌（planh）の翻訳」，『福岡大学研究部論集　A：人文科学編』第 9 巻 3 号（2009），pp. 11-21

[2] H. Springer, *Das altprovenzalische Klagelied*, Berlin : Vogts, 1884, pp. 18-23 の言う礼賛，嘆き，祈りに筆者が言葉を補って記している。

な力を総合的に意味するもので，その力を構成する宮廷人としての徳である「気晴らし（solatz）」や「女性への奉仕（domnei）」，領主としての臣下に対する社会的な力を示す「気前のよさ（largueza）」や「誇り（orgolh）」，人格的徳である「節度（mezura）」，「分別（sens）」などが，それぞれ賞賛されることになる。これらの徳を示す語は，校訂本で大文字から始めて記されていることが示すように，しばしば擬人化されて用いられている。また，同じ歌の第二連が示すように，故人が持ちあわせたこれらの徳は，しばしば歴史上の領主や同時代の物語に登場する英雄の徳と比較されて，故人がこれらの人物と比べてなお優れた人物であったことが述べられる。

「詩人・共同体の嘆き」では，上のような徳を持った人物がこの世から去ってしまったことによりもたらされた打撃に焦点があてられる。この際，詩人が個人としての哀悼の念を述べるのであれば，この歌の第五詩連にあるように「今後私はどうしましょうか？」という言い回しがしばしば使われる。また，共同体としての感情を述べる際には，例えば第四詩連にあるように，故人の徳にあずかるために今まで共同体に訪れていた人々は今後来ないだろうというように，故人の死によって共同体全体の価値が下がったということが強調される。故人と共に故人が持っていた「値打ち（valor）」がこの世から去ってしまうことは，共同体全体の「値打ち」の一部が奪われることなのだ。まさに，この歌の出だし（慣習的にこの歌のタイトル）に示されているように，故人の死によって宮廷人にとって理想の価値体系が「崩壊しつつあることが」嘆きの対象であるというわけである[3]。

「神に対するとりなしとしての祈り」は，一般に歌のトルナーダ（歌の最後に置かれる他よりも短い詩連）か，その直前の詩連において，捧げられる死者のための祈りである。祈りが向けられる相手は，ここに訳した全ての歌ではキリスト教における神であるが，聖母マリアやカトリック教会における聖人に神へのとりなしを祈るという場合もある[4]。

詩形については，ここに訳したものの全てがそうであるように，荘重さを表現する十音節がとられることが多い。

このように定型的な作品のあり方に対しては，特に 1970 年代の頭までは，個人的な真

---

[3] P. H. Stäblein, 'New views on an old problem : The dynamics of death in the *planh*', *Romance Philology* 35 (1981), pp. 223-234 (p. 229)

[4] 前掲の拙訳の中では，セルカモンの « Lo plaing comenz iradamen » に聖ヤコブへの祈りが，ギエム・デ・サイント・レイディエルの « Pois major dol ai que autre chaitius » に聖ペテロと聖ヨハネへの祈りが，フォルケト・デ・マルセーヤの « Si cum cel q'es tan greujatz » に聖母への祈りが現れている。

実の感情の欠如を理由として，とるに足らないものであるとする傾向があった[5]。しかし，近年では，「詩人・共同体の嘆き」について上で述べたところで言及したように，一見静的で固定化されたディスクールの中に，当時の宮廷における価値体系の崩壊という動的な要素を見るという試みもある[6]。筆者自身は，定型的で固定化された主題や表現が他の作品でいかに喜劇的に転用されているかという関心から哀悼歌の調査に取り組んでいる[7]。

作者について

W．P．シェパードとF．M．チェインバーズの校定本に収められた研究によると[8]，アイメリック・デ・ペギヤンというトルバドゥールの人生を示す資料は，彼が歌った作品と，彼の人生について同時代人が記した「評伝」（vida）以外にはない。特に後者は一般的に詩人本人を知る人が書いたものとは限らず，むしろ作品から構成した虚構の部分を含むことが多く，これだけでは今日の研究においては信用するに値しない資料である。これらに記されている固有名と歴史的資料をつきあわせて示されている結果を，ここに訳した作品との関係から以下にごく簡潔に記すこととする。なお，「評伝では」という断り書きがない限りは，校訂者たちの論の要約であるものとする。

詩人は，現在のスペイン国境に近いサン・ゴーダンの近郊にある「ペギヤン村の」という名前を持ちながらも，「評伝」では，織物商の息子としてトゥールーズで生まれたとされている。推定生年は，遅くとも 1175 年ということである。「評伝」によると，町人の

---

[5] A．ジャンロワは，哀悼歌が自発的な感情の発露を欠いて，固定化した大げさな表現を濫用していると述べている（A. Jeanroy, *La poésie lyrique des troubadours*, Toulouse / Paris : Pivot / Didier, 1934, t. II, pp. 237-246）。また，H．シュプリンガーの挙げた礼賛，嘆き，祈りという三つの主題についての研究を発展させる目的で，構造主義全盛の時代に行われたS．C．アストンの二つの研究では，主題についても表現についても 'standard'，'limp'，'trite' といった平凡さを表現する語が繰り返し使われている（S. C. Aston, 'The provençal planh : I. The lament for a prince', in *Mélanges de philologie romane : dédiés à la mémoire de Jean Boutière (1899-1967)*, Liège : Soledi, 1971, pp. 23-30 ; id., 'The provençal planh : II, the lament for a lady', in *Mélanges offerts à Rita Lejeune*, Gembloux : J. Duclot, 1969, pp. 57-65 のうち特に後者）。

[6] P. H. Stäblein, op. cit.

[7] 高名康文「『狐物語』とクレチアン・ド・トロワの物語における喪の嘆き」，『福岡大学人文論叢』第 39 巻 4 号（2008），pp. 1081-1121；Y. Takana, « La parodie du *planctus* dans le *Roman de Renart* », in *Les études françaises au Japon. Tradition et renouveau*, Louvain : Presses universitaire de Louvain, 2010, pp. 11-23.

[8] éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *The Poems of Aimeric de Peguilhan*, Evanston, Illinois : Nothwestern University Press, 1950, pp. 3-25.

妻との恋愛沙汰を契機にトゥールーズから逃げ出し，カタロニアでトルバドゥールのギエム・デ・ベルゲダンとの知己を得る。カスティリア王，アラゴン王の宮廷に出入りして，王たちに詩を捧げている。ここで数年を過ごした後，イタリアに移り，現在のピエモンテ州のモンフェッラートの侯ギヨームの厚遇を得る。「評伝」にはこの人物の名前しか現れていないが，ここから離れた後に得たフェラーラからヴェローナを治めたエステ辺境伯アッツォ六世（治世は 1196-1211）と，マラスピナ辺境伯ギエム（治世 1194-1220）による保護は大変に手厚いものであったようで，アイメリックが遺したとされる全ての哀悼歌は，これらの人物か，これらの人物の係累であるという類推が可能な人物に向けて歌われている。

故人の没年順に配置したそれぞれの哀悼歌のうち，「私は決して忘れることができないと思っていました」（Ja no cujey que•m pogues oblidar）と「かつて私が快活に陽気に歌ったとしても」（S'ieu hanc chantiei alegres ni jauzens）はマラスピナ辺境伯ギエム及びに，彼とヴェローナを共同統治していて彼より僅か五日前に亡くなった聖ボニファチオ伯ボニファチオに，また，「今や『値打ち』が崩壊しつつあることが明らかになりました」（Era par ben que Valors se desfai）はマラスピナ辺境伯ギエムに，それぞれ捧げられている。「今や，すっかり私から離れて行きました」（De tot en tot es er de mi partitz）における伯夫人ベアトリッツについては，どの人物を指すのか，現在のところ定説はないものの，W. P. シェパードと F. M. チェインバーズはアッツォ六世の娘ベアトリーチェではないかという説を立てている。この女性が伯夫人としてではなく修道女として亡くなったという弱点はあるにしても，この女性がアイメリックの他の歌によく登場して，彼の父性的な愛の対象であったことを考えるならば，切り捨てることのできない説だと言えるだろう。

翻訳について

前述の W. P. シェパードと F. M. チェインバーズの校定本を底本とした。訳にあたっては，「12 世紀のトルバドゥールによる哀悼歌（planh）の翻訳」では散文訳の形で提出したが，今回は行分け詩の形をとった。やむを得ない場合を除いて，できる限り各詩行の内容が一致するようにしている。原文の構文からすれば不要な倒置法が頻出するのはこのためである。文の単位は日本語の句読点によって示すようにした。また，内容を明瞭にするために原文を補った箇所は，[...]で示している。

アイメリック・デ・ペギヤンの哀悼歌

私は決して忘れることができないと思っていました

Ja no cujey que•m pogues oblidar (PC10.30)[9]

死者：マラスピナ辺境伯アッツォ六世と聖ボニファチオ伯ボニファチオ（†共に 1211 年）

詩型：a10 b10 b10 a10 c10 c10 c10 d10 d10 (Frank 568 : 1)[10]

I

私は決して忘れることができないと思っていました，
友人や，領主たちのせいで味わった痛みのことを。
しかし，人は大きな痛みをもっと大きな痛みのために忘れてしまうのです。
埋め合わせることができないような痛みですから。
というのも，この世で最も優れて学識のある方[11]が，
— やめておきましょう，エステ辺境伯のことは皆さん
どのような方かよくご存知で，あなた方に向かってあの方を賞賛しても仕方ありません —
亡くなってしまったのです。とはいえ，いつの世でも，
これほどに良い慣わしが同時に死んでしまうことがあるとは思いません。

II

あの方は賢く，物知りで，節度をもって
行動することができました。その値打ちは
一番の高みに上りつめ，評判も上がりました。

---

[9] 詩の歌いだしの原文を，ピレットとカルシュテンの書誌（A. Pillet und H. Carstens, *Bibliographie der Troubadours*, Halle : Max Niemeyer, 1933）による分類番号と共に記している。

[10] 各連の韻律と，I. フランクによる詩型の分類番号（I. Frank, *Répertoire métrique de la poésie des troubadours*, 2 vols., Paris : Champion, 1953-1957）を示している。

[11] 底本のテクストでは，写本の読みに従って « coms »（公）を採用しているが，底本の校訂者たちの指摘の通り，次行では同じ人物を指して « marques »（辺境伯）とあるので，« cors »（身）と読みかえて訳している（éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, p. 163）。

下げないようにすることができたのです，
値打ちを，分別を持って。寛容で，礼儀正しく，
善人たちには謙虚で，悪人たちには自尊心に満ち，
女性に対しては，あらゆることにおいて，そつがなく，
いつも，精一杯に正直でした。
そうするために，心と分別と行いを一つにしていましたから。

III
他にも私には耐え難い悲しみがあります，
ヴェローナの陽気な伯のことです。大いなる美の
華であり，あらゆるよきことの輝きでした[12]。
あの方の長所を語ろうとする者がいたとしても，
一月では全てを語ることはできないでしょう。
また，それを聞いて，心からあの方を悼まないで
いることができるような人は誰もいません。
ですから，一度にやってきたこれら二つの悲しみは
今後はいつまでもなくならないでしょう。

IV
辺境伯殿、あなたは贈与をさせました，
[あなたの見本がなければ]贈与することを喜ばなかっただろう人たちに。
また，あなたはつまらない贈与者が
与えるものを増やすようにさせました。彼らが耳にした際に，
あなたがどんなに大盤振る舞いをするのかを。
これからは誰が，あんな立派な贈与や大きな善行をするのでしょうか？

---

[12] 「あらゆるよきことの輝きでした」と訳した箇所には，写本では解釈に影響するヴァリアントはなく，« de totz bes colors » とある。底本の校訂者たちが，colors に「輝き」の意を与えて，前行の flors（華）と同義で使われていると解釈しているのに従う。bes を bels ととって flors に結びつけ，「あらゆる美しい色の」「華」ととる研究者もいるが，この解釈はとらない（éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, p. 164）。

どの宮廷からあの豪華な馬具はやって来るのでしょうか，
あなたの宮廷からいつも来ていたような。
誰もあなたほど，一度にこのようなものを贈りませんでしたから。

V
辺境伯殿，楽人たちはどうするのでしょうか，
あなたがあれほどに施しや名誉を与えていた彼らは。
楽人たちには一つの忠告しかすることができません。
死んで，あの世にあなたを探しに行くことです。
この世には，彼らのことを考える人はほとんど見当たらないのですから。
あなたはいないし，勲高い伯もいないのですから。
神は，奪った多すぎるものと比べれば少ししか我々に残しませんでした。
いや！　嘆きと，ため息と，痛みが一緒になって，
ずっと続くのに十分なものを残しました。

VI
過去に未来にいつも存在するあの真実の神が
あの方たちを二人とも一緒に天国に置いてくれますように。

かつて私が快活に陽気に歌ったとしても[13]

S'ieu hanc chantiei alegres ni jauzens (PC10.48)

死者：マラスピナ辺境伯アッツォ六世聖ボニファチオ伯ボニファチオ（†共に 1211 年）
詩型：a10 b10 b10 a10 a10 c10' c10' d10 d10 (Frank 504 : 5)

I
かつて私が快活に陽気に歌ったとしても，

[13] この作品の作者がアイメリック・デ・ペギヤンであるか否かについては異論もある（Voir éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, pp. 26, 27）。

今は苦しみ，悲しみとともに歌いましょう。
私の全ての喜びは悲しみと嘆きに変わったのです。
私は悲しく，私の歌は悲痛です。
最良の辺境伯であり最も勲高い方が，
最も敬われて，不実なところがなく最も確かな方が
・　・　・　・　・　・　・　・　・[14]
亡くなったので。エステの立派ですぐれた辺境伯のことです。
あの方の死において，「栄誉」と「喜び」と「歌」は死ぬのです。

II
辺境伯だけが亡くなったわけではありません。
あの方と同じ高貴さをもった最良の伯が
一緒に亡くなってしまったのです。我々の悲しみと損害は
二重なのです。立ち直ることは決してないでしょう。
残された者は，それだけ大きなものを失っています。
意地悪で不誠実なこの世よ，
お前と関わったものはしばしば裏切られる。
お前が命じることを最も行ったり言ったりする者は
その千倍騙されることになるのだから。

III
ああ！　今後は誰があれほどによく
他人に対して名誉や敬意[15]を与えることができるでしょうか？
誰が今後はあれほどの純粋な愛情を
友人や仲間に対して持つことができることでしょうか？
人は教養人であることができるでしょうか，

---

[14] この箇所と第四詩連の第 9 行は，この歌を収めている二つの写本の両方で欠落している。
[15] 原文の « honramens ni honor » にある onramen も onor も抽象的な「名誉」「敬意」から「封土」「財産」といった具体的なものまで指す。

辺境伯がそうであったように？　[死によって]「栄誉」は悪化しています。
誰があれほどによく心配りをすることができるでしょうか，
万人に対して？　親しい人たちもよそ者も
あの方は友人として，快い者として扱うことができたのでした[16]。

IV
まだ，歯を食いしばるわけにはいきません，
伯について賞賛を述べることなしには。
あらゆる資質について，あの方のものが最良でした。
雅びな語らいも，優しい応対も，
気前のよさも，力も，大胆さも，
陽気な冗談も，完璧で純粋な美しさも
あの方と共にありました。ああ，私たちは大いに惜しみ続けることでしょう，
今後，恋を知る二人の友人のことを。
・　・　・　・　・　・　・　・　・

V
耐えがたく激しいです，
「値打ち」が辺境伯，私の主人[の死]において持つ悲しみは。
あの方は，「栄誉」と「値打ち」の頭目，
あらゆる良き完成の華であり果実，
敬意と名誉の師でした。
ああ，誰が語ることができるでしょうか，
私たちが味わっている不幸や，
悲しみや，損害や，災厄を。その損失と損害は，
私たちと共に留まりました。恐れおののき，悲しみに満ちた私たちと。

[16] 原文の « Sabia tener amics et agradans. » の « sabia » は本来は三音節だが，二音節と勘定しないと詩形からの逸脱になる（éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, p. 228）。

VI
真実の主である全能のイエスよ，
正しく，謙虚で，優しさに満ちた王よ，
罪びとたちが加護を願う救済者キリストよ，
二人の領主を，主よ，お守り下さい，
彼らの慈悲と寛大さと
誠実さ，そして確かな信頼に免じて。
主である神よ，正義のために
あの方たちのそれぞれに対して本当の贖罪者でいなくてはなりません。
各々が誠実で，全く偽りがありませんでしたから。

VII
哀悼歌は，悲しみと嘆きと共に終わります。
悲しみに始まり，痛みの中に留まるものですから。
ですから，悲しみと共に私の歌を終えなければなりません。
この世で一番優れた方が一瞬にして失われたのですから。

今や「値打ち」が崩壊しつつあることが明らかになりました

Era par ben que Valors se desfai (PC10.10)

死者：マラスピナ辺境伯ギエム（†1220 年）
詩型：a10 b10 b10 a10 c10' c10' a10 d10 d10 (Frank 554 : 1)

I
今や「値打ち」が崩壊しつつあることが明らかになりました。
あなたがたはそのことを知り，理解することができます。
次のものを支えていこうと一番望んでいた方，
「気晴らし」，「女性への奉仕」，「気前の良さ」を真心をもって，
また，「節度」や「分別」，「知識」や「友情」，

「謙虚さ」，卑しい心のない「誇り」，
そして，良い行いを過不足なく，
その方が亡くなりましたから。マレスピナ辺境伯ギエム，
よきことごとの鏡であり師でした。

II
よき行いにおいて，この世にあの方に並ぶ人を知りません。
私が見たところ，食べ物についても，持ち物についても，
アレクサンドル大王も，あれ程には気前よくありませんでした。
お願いをしてくる人に「駄目だ」と言ったことも，因縁をつけることもありませんでした[17]。
ゴーヴァンも，武芸においてあの方よりも秀でているということは全くありませんでした。
イヴァンも，あれほどに宮廷作法を知ってはいませんでした。
トリスタンも，あれほどに愛の試練を受けませんでした。
今後は，誰も諌められたり叱られたりすることはないでしょう，
失敗しても，鏡が存在しないのですから。

III
今では，どこに行ってしまったのでしょう？　あの方の楽しくて陽気な言葉も，
あの方の力強いが上にも力強い行いも。
それは[あまりにもすばらしくて]，他の行いの値打ちを失わせていました。
ああ神様，トスカナからロンバルディアまでを照らしていた
明るい陽射しが，どれ程に陰ってしまったことか。
皆，あの方の光のお陰で，
恐れたり戸惑ったりすることなく，道を往来していたのでした。

---

[17] 原文は，« ni trobet plai »。底本の校訂者たちによると，trobare plag という表現の用例は他にないということで，彼らが V. de Bartholomaeis の翻訳 « nè creò liti »（éd. V. de Bartholomaeis, *Poesie provenzali storiche relative all'Italia*, t. 1, Roma : Tipografia del Senato, 1931, p. 240）に従って訳した "nor picked a quarrel with him" に従う（éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, p. 84）。

星が三人の王全員を導いたように，
あの方は「栄誉」を導くことができました。それ程に雅やかな方だったのです。

IV
［今後は]誰のために，傭兵たちは遠くからここにやって来るでしょうか？
優れた楽人たちも。彼らはあの方に会いに来ていたのです。
あの方は，海のこちら側と向こう側のどの王族よりも
彼らのことを誉めたりかわいがったりすることができたのでした。
技も芸もない大勢の人たちも
誰も取り損ねることのない，あの方の贈り物のために[ここに来ていたのでした]。
頻繁に，葦毛，黒鹿毛，鹿毛の馬を
馬具[18]と一緒に与えていましたから，
私がかつて見たり知ったりしたどの領主よりも。

V
親愛なる立派な殿よ，勲高い方，私はどうしましょうか？
どうして，あなたなしにこの世に生きて留まることができるでしょうか？
あなたは，私の喜びとなることをたくさん言い，また行ってくれましたので，
他の喜びは，あなたのものと比べれば，私を不愉快にします。
あなたがいるから私を敬って迎え入れてくれていた，という人々もいますが，
彼らは，私に会ったことなどないというように他人行儀になってしまうでしょう。
いつまでたっても，代わりになる人や，
あなたの[死の]ために被った打撃を償うものを見つけることはないでしょう。
人が私にそんなことができるだなんて思いもしません。

VI
三位一体の主が，

[18] 前の行で記された馬と並べて « ez autr'arnes »「他の馬具も」とあるが，馬も乗馬道具の一つとしてとらえているものと解釈し，日本語に訳す際には「他の」を削除して「馬具」とした。

あなたを，あなたにとって必要であるだけ，助けてくれますように。

今や，すっかり私から離れて行きました

De tot en tot es er de mi partitz (PC10.22)

死者：伯夫人ベアトリッツ（†不明[19]）

詩型：a10 b10 b10 a10 c10 c10 d10 d10 (Frank 577 : 5)

I

今や，すっかり私から離れて行きました，
私に残されていたのと同じあの喜びは。
どうしてこれほどに動揺しているのかご存知でしょうか？
よき伯夫人ベアトリッツのためです。
あの一番優美で，一番高貴であった方のため。
亡くなってしまったのです。ああ，神よ。なんと残酷な別れであることか，
とても辛く，耐え難いので，私は悲しくて，
思い出すと心は私から旅立って行きそうになります。

II

あの方のふくよかで美しい体はどこに行ってしまったのでしょうか？
よい人たちに愛されて，大切に思われていたというのに。
まるで奇跡を起こすかのように，人々がやって来たものです。
わが身を損なうことなく，悲しむ人々を陽気にできたのです。
そして，皆を楽しくすると，
もっと大きな悲しみに彼らを突き落としたものでした，
別れの時には。人は[あの方と]別れたら，すぐに戻って来ない限り，

[19] 底本の校訂者たちが主張するように，ベアトリッツがアッツォ六世の娘ベアトリーチェであったとすれば，その没年は 1226 年である（éd. W. P. Shepard & F. M. Chambers, *op. cit.*, p. 13）。

幸せになることはありませんでしたから。

III
あの方との会話は陽気で洗練されていました。
「ようこそお越し下さいました」というもてなしも。
あの方のお話は，完璧かつ巧みで，
受け応えは，喜ばしくて心地よく，
眼差しは優しくて，少し微笑むようであり，
人に栄誉を賜る様は，「誉れ」よりも称えられていました。
あらゆるよい美点を持ち合わせていました，
世の中の他の女性たちよりも。美しさについてもそうだと思います。

IV
今後，人は誰によって栄誉を賜り，報いてもらえるのでしょうか？
誰によって，よい詩は聞いてもらえるのでしょうか？
誰のお陰で，人はあれほどに幸せ一杯になれるのでしょうか？
誰によって，美しい言葉は喜ばれ，誉められるのでしょうか？
誰のために，美しい歌がふさわしく作られるのでしょうか？
誰のために，愛の奉仕が考えられるのでしょうか？
誰のためか，どのようにか，何のためにか教えてください。
私は知りませんし，我が身には分からないのです。

V
奥方よ，「若さ」はあなたと共に埋葬されました。
「喜び」もまるごと埋められて，失われました。
あなたが挨拶してくれるだけで，皆が自分のことを，
ただそれだけで，豊かで癒されていると思ったものでした。
雅やかな御身を見たことがある人は，悲しいことでしょう，
見たことがない人も悲しいでしょうが，見たことがある人ほどに激しくというわけではないでしょう。

別の眺めを代わりに，というわけにはいかなくなってしまったのです，
あなたを見たことがある人は。心が[あなたの姿を]見ることで一杯になってしまったので。

VI
ベアトリッツ様，慈悲に満ちた神が，
母君と，また自ら，あなたと共にいてくださいますように。